



箱庭サブストーリー

前編

novels

大森藤ノ

魔法をかけられた『箱庭』があつたとする。

魔法をかけられた『箱庭の住人』は、魔女の言いなり。

無自覚と誤認の狭間で、彼女が望む通りに立ち振る舞う。

まさしくロール・プレイング。

魔女が定めた新たな秩序に従い、魔女の愛を成就させるための異界を作り上げる。

もし、魔法にかからなかった者がいるとすれば、それは間違いなく主人公。

それは超越者の中でも僅かな神々か、魔法をかけた後で『箱庭』に舞い戻ってきた妖精達か、あるいは愚かに過ぎる一途な憧憬を秘めて魅了を弾く白き兎か。

箱を覗き込む俯瞰者が天に残る神々しかいない以上、『箱庭』の動向は、主人公たる彼等彼女等の瞳を通じて観測される。

「オツタル、ヘスティアの子供達は？」

「この先に。まだ目覚めていませんが、アルフリッグ達が捕えています」

『箱庭』に魔法をかけた直後。

迷宮都市に大規模な『魅了』を施し、全てを捻じ曲げた『女神祭』最終日の昼。

未だ都市全体、多くの神々と人々が『魅了』の忘我状態に陥っている中、『豊穣の塔』から降りたフレイヤは中央広場を横断していく。

魅了された人形達が左右に分かれて作り上げる仰々しい道に何の感慨も示さず、隣に並ぶ

眷族へと告げた。

「なら先に『魅了』の重ねがけをする。普段からベルと接しているあの子達の絆が他の子より深いのは疑いようがないし、何より処女神の神血を宿してるわ」

「……」

「『魅了』の権能に抗い、私が定める規律を破る可能性が最も高いのは、処女神の眷族。ベルに『箱庭』の絡繰りが気付かれないために、念入りに対処する」

「……かしこまりました」

「ベルが目覚ます前に潰しておかないといけない綻びはいくつもある。手を貸して頂戴」

あまりにも入念に異常事態の排除に努めるフレイヤに——普段の女王らしくない姿勢と余裕のなさに——オツタルは僅かな沈黙を挟んだ後、これまで通り領いた。

都市全体を襲った無差別の『魅了』の呪縛は、美神自らの神血を通じて【フレイヤ・ファミリア】のみ解除されている。あらかじめ全ての事態を把握している美神の眷族達は、主が望むがままに行動していた。

反逆者の汚名も厭わない者を除いて、この『箱庭』を永遠のものに変えんがために。

「これで私も下界の凌辱者……イシユタルのことも、ディオニユスのことも笑えない醜い女神。だけど——やめないわ。私が欲しいのは、もうたった一つだけ」

自嘲の言葉にも揺るがない凍てついた相貌の女神は、果たして有言実行をした。

強襲され全員が倒れた処女神の眷族に『魅了』を数回に分けて施し、彼女達の中に眠る『ヘステイア・ファミリア』のベル・クラネルを誤認の海底へと沈めて、抹消した。彼女達の人格を壊さないように、丁寧に、丁寧に、病的なまでに。

目を覚まし、主神のもとへ帰る頃、白髪の少年のことを忘れるどころか危険人物として警戒する眷族達はこうして生まれた。

いつそ処女神が絶望するほどに。

——そう、『箱庭』の動向は主人公たる彼等彼女等の瞳を通じて観測される。

だからこれは、主役たる彼等彼女等の目が届かないところで存在した、単なる逸話。

箱を覗き込んでいた俯瞰者しか楽しむことのできなかつた、小さな世界の片隅であった小さな物語だ。



カン、カン、と。

火花散らす鉄の音が工房に響き渡る。

大粒の汗を垂らし、赤髪の青年が鎚を振るっている——のを傍迷惑そうに見やりながら、椿・コルブランドは自身の作業の前準備を行っていた。

「まったく、ここは手前の鍛冶場だぞ？ 本当に我が物顔で剣を打ち始めるやつがあるか」

「俺達が『遠征』に行っている間、お前だって俺の工房で好き勝手やってただろ」

「ぐぬっ……！」

【ヘファイストス・ファミリア】団長であるハーフ・ドワーフの文句に、ヴェルフは顔も上げずに言い返す。【ヘステイア・ファミリア】が下層域に『派閥連合』を組んで向かった際、本拠の留守番役に抜擢されたにもかかわらず好き放題振る舞い、挙げ句にヴェルフの備品も壊している椿は何も反論できなかつた。

そんな椿が小言を言いたくなるくらいには、連日泊まり込みで行われていたヴェルフの作業

は佳境を迎えていた。鍛錬に集中し出せば打ち損じのないよう返事の一つもしない青年は、ようやく刃の整形を終えて、真つ赤に熱されたそれを水に浸けた。

じゅううう、と音を立てて凄まじい湯気を立ち上らせる焼き入れ作業。その後も黙々と手を動かし、少なくない時間を仕上げに費やしていく。もとは同じ主神の眷族であり、弟子にも等しい青年の作業を、椿は黙って眺めた。

「それに、本当ならヘアファイストス様に見て頂きたかったんだ。お前が止めるから、こんなことになつたんだろ」

「『助言を超越せ』などと注文しておいて、なんとという言い草だ。手前は親切で止めてやったというのに。……今、あの主神様はすこぶる機嫌が悪い」

「初耳だ」

「鉄のことばかり考えてお主が聞いておらんかっただけだ、たわけ。『自分が打った武器を思い出せない』などと訳のわからんことを鍛冶神は言っておつたが……とにかくお主の工程を見守って、金言の一つを落とすことも今はできんわ。苛立つくらいには拙い鍛錬に、『言うべきことなどない。やり直し』とでも言つて終わりだ」

姉弟子なんて思つてやらない、超えるべき壁の辛辣な物言いに「くそつたれめ」と顔色も変えず眩きつつ、ヴェルフは手の動きを止めなかった。

やがて、一振りの短剣ができた。

片手に持ち、切っ先を天井に向けた剣身をじつと見据えていたヴェルフは、そこでようやく椿の方を見た。

「どうだ？」

「鈍らだ。主神様はおろか、手前の剣にも届かん」

簡潔な問答に、短い酷評。

「だが、以前の武具よりは遥かにマシだ。上級鍛冶師などと名乗る程度ならば、許される」  
続く言葉は、面倒な気質を持つ職人の素直ではない贅辞。

『確かに腕を上げている』と最上級鍛冶師の中でも上々と呼べる評価に、しかしヴェルフは誇りもしなければ愉悅にも浸らない。

むしろ椿からすれば理不尽な苛立ちを滲ませながら、問いを重ねる。

「そんなことを聞きたいんじゃない。俺が聞きたいのは……!」

そこまで言い放つて、そこから先を言い淀む。

胸にわだかまる感情を言葉にすることができない。

苦虫を噛み潰したような顔を浮かべながら、自分が何を吐き出したいのかもわからない。

椿が言及しているのは職人としての技術や、姿勢に対するものだ。

かつては『ひよっこ』だったヴェルフの技術や心構えが向上して、作品に表れているという意味合いが、彼女の言葉には多分に含まれている。

ヴェルフもそう思う。

『遠征』の経験を通じて鉄や武具に対する熱意の丈が伸び、一度一度の鍛錬に臨む覚悟が段違いに増した。一鎚入魂という言葉が相応しく、そそがれる魂は鍛冶の腕をも底上げした。

あらゆる知識と経験を掘り返して、引きずり出し、『未知』たる輝きに挑む。

その極致の一片をヴェルフにもたらしした。

そしてその一片に指を掠めたからこそ、ヴェルフはより食欲に知識と技を求め、あの極限の境地にもう一度至らんと精進している。

つまりヴェルフ・クロッヅは鉄に対して、より真摯になった。

鍛冶師としての殻を一つ破り、階段を一段上がった。

不遜だとは思いますが、そんな実感をヴェルフ自身も得ている。

(だけどっ……！)  
しかし、何かが。  
何かがおかしい。

技も、情熱も、覚悟も伴っている筈なのに、目の前の短剣はヴェルフが思い描く理想に届いていない。

他の冒険者や鍛冶師が見れば羨ましがっては欲しがり、嫉むほどの業物。  
しかしヴェルフから言わせれば、『業物の振りをしている偽物』だ。

(偽物………偽物………そう、『贋作』なんだ。何かから模作したわけでもないのに、命を吹き込んだ筈なのに、俺にはせっかく生まれてきた短剣が『贋作』に見えちゃう)  
胸の奥から感覚の欠片を手練り寄せ、曖昧な言語化に成功するのとはほぼ同時に、樁もまた口を開いた。

「確かに今のお主は、周りと比して一つ上の鍛冶師と認められる。しかし……それと同時に、何かが欠けている」

何か。  
また何かだ。

自分のみならず、同じ職人である樁もそう感じている。

「……何かって、なんだ？」

「……お主の問題など手前が関知するものか。ただ、その欠けた何かは………以前のお主は持っていたような気がする」

かつて未熟で粗削りであっても、当時のヴェルフが持っていたものが、今は消えている。

鍛冶の一部始終を見守っていた樁はそう告げた。

あえて全てを言わず、ヴェルフ自身に気付きを得させようとしている、というわけでもない。

彼女も何か引っかけかかっているように片方の眉をひそめ、言葉を濁していた。

それが、気持ち悪い。

鍛冶師としてこの上なく、吐き気がする。

手の付けられない怒りにさえ昇華しようとしている。

まるで空白の歯車。

周囲は問題なく囁み合って回っているにもかかわらず、その一箇所だけがぼつかりと空き、空転の音すら生まれない。その空白を埋めなければ真髄たる核には届かず、ヴェルフはこれからも『贋作』を生み出してしまおうというのに。

(そもそも……何で俺は『刀』じゃなく『短剣』を打った？ 俺は命の専属だ。あいつと直接契約を結んだんだ。だから俺はヘファイストス様のもとから出て、ヘステリア様のもとに加わったんだ)

目の前の『贋作』に問いかけを発する。

(命は武芸百般つてやつだ。武器なら何だつて扱える。だから短剣を打つのは間違いない。間違いないが、あいつに似合うのは刀だ。俺があいつのために『打ちたい』と真っ先に思うのは、極東を彷彿とさせる刀なんだ。何かに迷って、首を傾げてるなら、刀に辿り着かないといけない筈なんだ。——なのに、どうして俺は短剣を打った?)

眼前の短い剣身に『違和感』を抱く。

(俺は、こいつを屈けてやりたい何かを、忘れてるのか——)

鏡面のように光沢を放ち、何かを訴えてくる武器の叫び声が、『疑念』をもたらす。

「——いや、ありえない」

そして、直ちに『魅了』が作用する。

青年の瞳が女神の眼光と同じ『銀の輝き』を帯び、魂に巻きつけられた『銀の鎖』がじゃら

じやらと音を鳴らす。

『疑念』に達した『違和感』ごとヴェルフは全てを消去した。

『疑念』に達していない椿が怪訝そうに見守る程度には、顔から表情を消した。重ねがけされた『魅了』は、幾重にも巻きついた『銀の鎖』となってヴェルフの魂を覆っている。熱情の光が漏れ出て真実に至ることなど許さない。欠片の綻びも認めない。その入念さと寒気を催すほどの複雑さは深過ぎる女神の執念を表すものだった。全身の管に『薄まった精霊の血』が通つていようと、とてもではないが覆せる代物ではない。

これまで通り、改竄された記憶が静かな渦潮のようにうねり、ヴェルフを誤認と誤解の迷宮から抜けさせ、偽りで塗り固められた美しい『箱庭』への出入り口に案内する。

無意識化の急激な心の動きは、代償として言葉にできぬ焦燥になる。

だから結局、ヴェルフは苛立ったままだった。

本人が気付いていないほどの時と回数を、『贋作への問いかけ』に費やし続けていた。

（俺が間違つてるのか？ 『贋作』が間違つてるのか？ 俺達の中で、一体何が欠けているんだ？）

いくら記憶と認識を改竄できても、『職人の感性』だけは捻じ曲げられない。

女神は『意識も自由も奪われた人形』にまで箱庭の住人を墮としていない。

だから、職人が作品に抱く感覚だけは奪えない。

その直感だけは、生まれては消えるを繰り返す。

魔法がかけられた『箱庭』の存在に勘付く、あるいは脅かす類のものではない、その狂おしい情熱は、ヴェルフを何度だつて焼き焦がした。ヴェルフは、身が炎に包まれていることにも気付けない。

だから彼は、何度目とも知れない、がっかりするほど同じで、決して手放すことのない自問

を、己の内側に発した。

何かのために――。

友のために、俺は武器を打っている――？



こん、こん、と。

絵巻に綴られる狐の涙のように、何かが泣いている。

春姫はそれがどこから聞こえているのかわからない。

自分の内側から響いている筈なのに、気付けない。

しんしん、と。

降り積もる雪のように頭に霧がかかって、ずっと会いたいと思っっている英雄に出会えない。体だけは男達の垂涎を集めるほどよく実り、熟れているくせに、まだ童子の心は青く白く、純粋に想い焦がれている。子供の妄想のように夢想している。

頁が開かれた本の上で、一千の鬼を斬り、哀れな娘を救い出す武士のように、『私の英雄』と出会いたいと、そう願っている。

「誰かとは……だれ？」

本拠の書庫で膝を崩し、英雄譚の頁をめくっていた春姫は、呟きとともにほっそりとした指を止めた。

続く